

## ***M-GTA 研究会 News letter no.23***

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：[grounded@ml.rikkyo.ne.jp](mailto:grounded@ml.rikkyo.ne.jp)

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、林葉子、福島哲夫、水戸美津子、山崎浩司

### <目次>

- ◇近況報告：私の研究
- ◇自著を語る
- ◇次回の研究会のお知らせ
- ◇編集後記

### ◇ 近況報告：私の研究

日本女子大学大学院博士後期課程 三輪久美子

今年3月の研究会で、小児がんで子どもを亡くした親の再生をテーマに研究発表をさせていただきました。研究会で発表させていただくまでには、自分なりに何度も何度も分析を繰り返しておりました。というのも、概念化から結果図作成までたどりついて、出来上がった結果図を見ると、プロセス全体が散漫となっていたり、軸が曖昧になってしまっていることを感じるものが多く、また最初から分析をやり直す必要に迫られたからです（分析ワークシートが詰まった段ボール箱が何箱も積み上がってしまいました）。そのようにして臨んだ研究発表ではあったのですが、結果としては大変不十分であり、木下先生をはじめ、皆さまから貴重なご助言をたくさんいただきました。そして、それらのご助言から、分析テーマの絞り込みが十分でないために再生の意味が幅広くなりすぎ、プロセス全体が散漫になってしまうということに気づきました。研究会での発表以降、分析テーマと分析焦点者を明確にするところからもう一度やり直し、最近、ようやく納得のいくプロセス全体像へとたどりついたところです。その間、私の大学で開講された小倉先生の M-GTA のご講義を受講させていただいたことも分析を進める上で大きな弾みとなりました（小倉先生、どうもありがとうございました）。

現在、汗と涙の結晶である分析ワークシートが詰まった段ボール箱の横で、出来上がったプロセスをもとに博士論文に取り組んでおります。長く辛い分析が終わった後、それを論文の形にまとめていく辛さをひしひしと感じているところです。

研究会や懇親会、夏合宿などを通して皆さまから本当に多くのことを学ばせていただき、大変感謝しております。M-GTA という研究方法にとどまらず、研究に対する熱意や人生に対する考え方など、皆さまから様々なことを教えていただくことができ、知的刺激だけではなく、生きる上

での刺激も大いに頂戴しております。これからも何卒よろしくお願いいたします。

**環太平洋大学 次世代教育学部乳幼児教育学科 志田久美子**

私は、2006年8月にM-GTA研究会に入会させていただきました。修士論文でM-GTAを用いて「緩和ケア病棟に勤務する看護師の死生観形成過程」について研究しようと考え、分析の方法を学ぼうと思ったからです。木下先生の書かれた本を何度も読んだり、研究会に何度か参加させていただきましたが、概念をつくったり、概念間の関係を考えたりすることが難しく、何度もやり直しました。木下先生からは、この研究のどこにオリジナリティがあるのかと問われ、頭を抱え込む日々が続きました。試行錯誤しながらやっと今年の2月に修士論文として提出することができました。12月8日には、日本看護科学学会学術集会で発表することになっています。研究テーマは「緩和ケア病棟に勤務する看護師の死生観形成過程」で、研究対象者は、A県内の3施設の緩和ケア病棟に勤務する看護師で、看護の臨床経験が5年以上あり、そのうち緩和ケア病棟勤務が3年以上ある6人を対象としました。その結果、次のことが明らかになりました。

- 1) 緩和ケア病棟に勤務する看護師の死生観形成には、個人的体験と職業的体験が相互に関係する。
- 2) 緩和ケア病棟に勤務する看護師の〈生の苦悩の直視〉の対処行動には、現実認識、希求行動、協同実践、思考停止の4つのパターンがある。  
現実認識、希求行動、協同実践の3つのパターンから、〈人間観の深まり〉に辿り着き、思考停止パターンの場合には辿り着きにくいといえる。
- 3) 死生観形成過程の個人的体験過程には、①死の自覚、②死の恐怖、③自己の死の自覚、④死の意味を探る、⑤自己の生と死の探求、⑥身近になった自己の死の6つのプロセスが見出された。
- 4) 死生観と死生観形成に影響する要因は、明確に区別できるのではなく、死生観が死生観形成に影響する要因にもなり、死生観は変化し続ける。

これらの結果は、看護師の生や死の学習の準備状態を把握する手がかりとなり、どこに働きかければ死生観が深まるかを示しているといえます。

M-GTAは、結果図のどの部分に働きかければ相手の行動がどう変化するのか予想できるので、一種の案内図ともいえると思います。ここがM-GTAのおもしろさだと感じています。

今後は、対象人数を増やし、理論的飽和化までもってゆき、新人看護師の「死の準備教育」の研修プログラムを作成したいと考えています。

**千葉大学教育学部附属小学校 山口政之**

会員の皆様こんにちは。名ばかりの会員となって5年目になりました。現在、東京学芸大学連合博士課程、言語文化系教育講座に所属し、子どもの読みのプロセスを研究しています。教育の

実践研究の場でも質的研究が取り入れられる時代が始まりつつあるのではないのでしょうか。今のところ研究論文レベルでないと M-GTA は役に立たないようですが、小学校の実践研究や教員養成に何らかの示唆が得られるのではないかと感じ、本研究会に関心を寄せています。残念ながら M-GTA に関する具体的な取り組みはまだありませんが、いつかは発表をしてみたいと思っています。

本当は初等国語科教育法の実践研究をするために現在の学校に赴任したのですが、言語教育の立場から小学校英語の研究にも関わってきました。小学校英語というと「歌、ゲーム、集会」と揶揄されがちですが、絵本を上手に使うことで成果の残る学習が可能なのです。また、これまでの私の研究成果を教員研修に生かそうと、ある民間企業の研修コンテンツの開発に取り組んでいます。

これ以外に総合学習として消費者教育の研究もしています。昨年度、契約に関する Web 教材を作成しました。ネットでご覧いただけますので、小中学生のお子さんがいらっしゃる会員の皆さんは一度ごらんください。「山口政之 東京くらし WEB」の検索でヒットします。今年度はシティ銀行から研究助成金をいただき、来年 2 月には授業を公開します。

本業の学級担任として今年度は帰国児童学級を担当し、その方面の研究も始めました。国語、英語、消費者教育、帰国と本当に小学校の教師とは広く浅く仕事をするものです。こうした学び方は博士論文への取り組みとは対極をなすのかもしれませんが。もっと狭く深くと思っているのですが……。会員の皆さんの研究内容や、研究に取り組む姿勢からも学び、自分を高めていきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

#### 大妻女子大学非常勤講師 松井由美

私は、数年前から認知症の人および家族介護者が地域で生活するためにはどのようなことが必要なのかについて研究しています。

認知症の人は今後も増加するといわれており、その多くは自宅で暮らすことを希望しています。しかし、認知症の人が地域社会の一員として生活することは容易ではありません。このような状況にある認知症の人が地域で生活していく上で家族介護者の支援は欠かせません。家族介護については様々なニュースが報道され、とても暗い生活をしていると想像する人もおられるかもしれませんが、私が関わらせて頂いた認知症の人を支える家族介護者は、介護は大変だが明るく生活しようとする人たちも多かったです。

そこで私は、家族介護者がどのように「ケア態勢」をつくりあげていくのか、ミクロな視座から見直したいと考えました。また、地域で認知症の人を支えている家族介護者は自身の「強さ」や「力」を活かしながら、ケアを継続しているという点にも着目して研究を進めたいと考えました。ケア態勢を確立していく経過やその内容について調査を行うにあたっては、質的な調査法を用いるほうがよりその状況を表しやすいと考え、M-GTA を用いることにしました。データは、M-GTA を用いて、家族介護者が「力」をいかして、どのようにケア態勢を作り上げていったのかについて分析しました。

データと対峙して強く感じたことは、インタビュー時の最後に、家族のこれまでのことについて何か話してもらえないかという質問をした時に語られた家族介護者自身がとらえた‘家族のいとなみ’に関するエピソードが、とても意味深いものだということでした。家族介護者が認知症の人をどのように理解するかということで介護のしかたはかわりますし、家族間・夫婦間の絆を深めたエピソード等は介護を引き受ける意欲にも影響していることがわかりました。また、家族介護者たちは、積極的にケア態勢を整えていく中で、様々な関係性や自分の生活ということも含めて人生を再認識するようになっていました。積極的に作り上げた介護態勢のもと、自分らしく生きることと折り合いをつけることが介護の継続を可能にしているということもわかってきました。

今後は、いかに研究の成果を家族介護者や現場で働く援助者に活用してもらうかが課題です。現在、学会誌に投稿のするために執筆中ですが、なかなか自分の時間を作ることができず苦戦中です。

このたびは、このような貴重な機会を与えて頂いたことに感謝致します。私事で研究会になかなか出席できない状況なのですが、何とか出席したいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

#### ◇自著を語る

##### 『ケア現場における心理臨床の質的研究—高齢者介護施設利用者の生活適応プロセス』 (グラウンデッド・セオリー・アプローチシリーズ)

小倉啓子著 弘文堂 2007年5月刊

ヤマザキ動物看護短期大学 小倉啓子

M-GTAのモノグラフとして、2007年5月に拙書「ケア現場における心理臨床の質的研究—高齢者施設利用者の生活適応プロセス」が弘文堂から出版されました。このような機会をいただき、誠に有難いことと感謝しています。M-GTAを初歩から指導して下さいた木下先生、M-GTAの研究会メンバーの皆様、歴代の代表・事務局・世話人会の方々、本当に有難うございました。弘文堂の中村憲生様にも忍耐強くサポートして下さいました。厚く御礼を申し上げます。

拙書のなかで、伝えたかったことは2つありました。ひとつは、介護施設の生活はホーム組織・職員のケアサービスで成り立っているのではあるけれど、入居者もまた施設に馴染み、自分なりの生活を築くために自分の持てるものを総動員してさまざまな‘つながり’行動をしているということです。わがままに見える行動、優等生的な行動、思い込みに近いような信念などを、彼らなりの施設環境との適合をはかる努力や工夫‘つながり’行動であるにとらえ、それらをケアに活かしていくことが必要であるということでした。

しかし、入居者の日常生活や行動は複雑で流動的で、「これ」として手にして見せることは出

来ないし、解釈すれば恣意的になる危険があります。そこで、もうひとつ伝えなかったことは、複雑で流動的で見えないことでも M-GTA を介すれば、自分にも他の人にも見えるし、納得もするような視点が得られるという M-GTA の有効性でした。また、自分に必要なことを自分で探す知的訓練になり、研究結果から援助実践のアイデアが広がるという側面も強調したいことでした。ただ、紙幅の関係で M-GTA の分析過程を詳しく述べることも出来ず、介護関係の方に読んでいただきたいこともあって随分省略しました。

読者の反応で有難かったのは、職員の立場をほとんど取り上げない研究であったのですが、フィールドとなった施設から「自分の考えが形になった感じ。私はこういうキーワードで考えている」、「非常に質が高い研究が当ホームでされたことは誇り」と評価していただいたことです。出版を機に施設とも新たな関係が開け、研究の助言をいただいています。また、本になって、いろいろと話してくれた入居者の方々のご協力に少しでも応えることが出来たかな、懸命に生きた生活の軌跡を残せたかなと思って、ほっとしています。やはり、研究は責任のある行為だと思います。

今後、次々と素晴らしい M-GTA のモノグラフが出版されると思います。楽しみにしています。

#### ◇次回研究会のお知らせ

日時：12月8日（土曜日）13：00～18：00

場所：立教大学（池袋）10号館 X208教室

#### <研究発表>

##### 研究発表1

発表者：藤野清美さん（新潟大学大学院博士前期課程）

テーマ：「慢性期統合失調症患者の語りを通じた自律的意志決定過程」

分析テーマは慢性期統合失調症患者の生活の再編成における自律的意志決定過程で、デイケアに1年以上通所し、40歳～65歳の方を対象としている。

##### 研究発表2

発表者：藤好貴子さん（久留米大学大学院医学研究科修士課程2年臨床看護専攻）

テーマ：「小児科病棟新人看護師の臨床体験プロセス～就職後3ヶ月の体験より」

内容：小児科病棟に配属された新人看護師が、就職後3ヶ月間の看護業務のさまざまな体験をどのようにとらえているか。また、その体験に対しどの様に意味づけを行い、行動につなげているのかを明らかにする。

#### <構想発表>

発表者：三澤久恵さん（共立女子短期大学看護学科）

研究テーマ：「高齢者の生きることの意味の探求に関する研究」

高齢者が生きることをどのように考えて、日々生きているのか、その生きる力の根底には何があるのかの視点を持ち、研究に取り組んでいる。

【編集後記】

- ・寒くなりました。立教大学では蔦や銀杏が美しく色づいています。
- ・連載企画の「近況報告：私の研究」は、みなさまのご協力により順調に進行中です。みなさんの研究、お仕事の様子が目に見えるようで、毎回非常に楽しみにしています。遠からず、みなさんをお願いすることになると思いますので、よろしくお願いします。
- ・「自著を語る」というコーナーは、文字通り、会員のみなさんが書かれたご著書について自ら語っていただくものです。今後もみなさんのご著書をこのコーナーで取り上げていきたいと思っています。
- ・さて、来週末は、今年最後の研究会です。研究会後は忘年会でおおいに語りましょう！

(佐川記)